

感性の諸領域，とくに匂いの文化についての， フランス南部と西アフリカ3カ国での初次的調査

川 田 順 造
KAWADA Junzo

はじめに

第2班が分担すべき研究領域は，身体技法，感性，身体との関連での民具である．時間的にも，予算的にも，また準備の上でも，大きな制約をもった初年度の事業において，川田の研究活動の基本方針は，これまで川田の研究の蓄積が比較的少なかった，聴覚以外の感性をめぐる調査と資料収集を優先して，第2年度以降の研究への見通しを与えることにあった．とはいえ，すでに川田が多年研究を行ってきた⁽¹⁾，身体技法，身体との関連での民具⁽²⁾，感性のうちでも聴覚にかかわる「音文化」⁽³⁾についても，この度の現地調査の機会に，従来の研究成果に付加する知見を，少なからず得ることができた．

平成15年度に川田が行った現地調査は，9月30日から10月12日までのフランス南部の調査と，12月8日から12月22日までの西アフリカ3カ国（ベナン，ブルキナファソ，マリ）の二つであり，その調査結果を中心に研究の概要と問題点を述べる．

I ブドウ酒の鑑識法に見る感性の言語表現： フランス南部（Châteauneuf-du-Pape）

ローヌ川流域丘陵地（Côte du Rhone）のブドウ酒作りの最大の中心である，Châteauneuf-du-Papeにある著名なブドウ酒博物館（Musée du vin）を中心に，石灰質の礫土が特徴的なこの地方のブドウ栽培〔写真1，2〕の農具，ブドウ酒製造の諸種の道具，味覚・嗅覚・視覚・触覚・聴覚が繊細に統合されたブドウ酒の鑑識法について調査した．

日照時間が長く気温も高いこの地方の，水はけの良い石灰質の礫土は，昼間吸収した太陽熱を夜間も礫土が保ち，Châteauneuf-du-Papeの原産地統制名称（A. O. C.=Appellation d'origine contrôlée）の原料として用いられてきた13種のブドウのこくのある風味（onctueux, corsé）を出すことに貢献してきた．この13種とは，Grenache, Syrah, Mourvèdre, Picpoul, Terret noir, Counoise, Muscardin, Vaccarèse, Picardan, Cinsaut, Clairette, Roussanne, Bourboulenceである．

農具についていえば，前輪（avant-train）のない，比較的最近まで鉄を用いなかった，先端の鋭く尖った小型の木製犁が広く用いられてきた．現在博物館に展示されているものは，鉄の刃先ときわめて狭い鉄の両翼を具えた全長3m程度のものであるが，前輪はついていない．しかし最も広く用

いられてきたのは、柄の長さ 140 cm 前後で、刃先が二又または三又、あるいは鶴嘴状に尖った手鋸であり、礫土の耕作への適応を示している [写真 3, 4, 5].

収穫したブドウを運ぶ背負い桶が、上部の広がった逆円錐形のものであることは [写真 6], ヨーロッパの背負い籠の特徴としてすでに川田が指摘してきたことと合致し、樽作りの技術 [写真 7] については、川田が別にフランスの樽作りについて詳細な調査を行っている⁽⁴⁾ので、ここでは省略する⁽⁵⁾.

諸感覚が動員されるブドウ酒の鑑識法 (dégustation) では、鑑識の順序からいえば、聴覚、視覚、嗅覚、触覚、味覚が関与する。まず、グラスに注いだときの音で、ブドウ酒の密度 (intensité) を聴く (écouter)。ガス含有の有無、注いだときの音の柔らかさ (sourd), 硬さ (aigu) は、ブドウ酒の質を「聴く」上で重要である。次に、グラスを目の高さを持って横から、次いで上から覗くようにして、色調 (robe) を見る。色調を表現するのに通常用いられる語は、la robe : brillante, claire, voilée, douteuse, tranquille, pétillante などである。その後、グラスを傾けてその上に鼻を近づけ、グラスを回して香り (bouquet) を嗅ぐ。香りには、主にブドウの品種に由来する第一次の香り (bouquet primaire), 発酵の度合いによる第二次の香り (bouquet secondaire), 古さによる第三次の香り (bouquet tertiaire) がある。香りの印象は、若いブドウ酒なら、花や果実の比喻で、古いブドウ酒なら堆肥 (humus) やキノコの比喻で、極めて古いブドウ酒は動物、なかでもジャコウジカ (musc) の比喻で言語化される。

口に含んだときには、口腔内の、とくに舌と口蓋の触覚によって、まず温度、粘稠性 (consistance), その他の触感が、か細い (mince), 肉厚の (charnu), 充たされた (plein), まるい (rond) などの比喻で言語化して表現される。口に含んだときの匂い (arôme) を表現する語は比較的少なく、リュウゼンコウ (ambre), スミレ (violette), キイチゴ (framboise), あるいはさらに、バルサム風 (balsamique), 焦げた (brûlé), 草質の (herbacé) などがある。そして味覚 (savour) は、舌の味蕾の位置と一部は上唇の内側によって感知され、こく (onctuosité), 甘み (sucré), 酸味 (acidité), 苦み (amertume), 塩味 (salé) などに大別されるが、それ以上の細かな印象については、簡単に一覧できないほどの多様な言語表現がある。

ブドウ酒の鑑識法の言語表現の豊かさは、とくにフランス語で著しいが、これは言語によって明確に表現することを好むフランス文化の傾向に加えて、フランス産ブドウ酒の国際的な商品化の歴史が古く、品質の規準化、言語化が早くから必要とされたことにも由来すると思われる。ちなみに、日本酒でも、いま挙げた諸感覚による鑑識は精緻になされているが、各醸造元内部でだけ通用する表現によっていることが多い。上記のブドウ酒の香り (bouquet) と匂い (arôme) に対応する鑑識法も、金沢の酒造家福光屋第 13 代当主福光松太郎氏によると、鼻で嗅ぐ「うわたち香 (上立ち香)」と、口に含んだときの匂い「ひっこみ香 (引込み香)」としてあり、日本酒では「ひっこみ香」に重きを置くが、これは果実酒と米の醸造酒の違いにも由来しているのかも知れない。

ブドウの品種や栽培地の自然条件による違いのように、日本の米もイネの品種、田の立地条件や土の質によって異なり、収穫された年の天候にも左右されることは、ブドウ酒におけるブドウと同様であるという。ただ、戦後エタノールから作る醸造用アルコールの使用が広まったこと、かつては蔵元ごとに自前の酵母を作り使っていたのが、戦後、国家の管理する施設で作られる 5~6 種の酵母を用いることが義務づけられ、画一化されたことなどによる、味、香りの多様性の減少も、日本酒につい

ては指摘されている。

鑑識法の規準化，言語化の進んだフランスのブドウ酒の例を一つの手がかりとして，日本酒をはじめ，世界のさまざまな酒の鑑識法における諸感覚のはたらかせ方を，言語化の不十分な事例も含めて，広汎に調査し比較することは，我々のCOEプロジェクトの研究の一環としても，重要であると思われる。

II 匂いの文化を探る：フランス南部（Grasse），および日本との対比

南フランスの中世都市グラス（Grasse）は，香水の町として世界に知られ，国際香水博物館はじめ，いくつもの有名香水メーカーの展示参考館がある。また，現代の代表的な調香師が，それぞれの実験室，工房をもって，実験・調香に励んでいる。ここでは，川田はこれらの施設での資料収集を行い，香りと色彩，形象など他の感性の領域とのクロスオーバーの試みでいま世界的に注目されている，調香師第2代のミッシェル・ルンドニツカ（Michel Roundnitska）氏を郊外の工房に訪ね，2時間余りお話しした。この対話ではとくに，現代文明で極めて大きな比重を与えられている視覚，聴覚の領域との対比で，嗅覚の訓練と教育の重要性，視覚や聴覚と嗅覚との連合（association）の可能性の探求が論じられた。

これまで川田は，嗅覚をめぐる文化にも関心をもち，1980年代には，調香用サンプルとテスト紙を用いて，日本とアフリカで，匂いとそれによって喚起されるものとの関連についての実験を行い，また，匂いと文字など視覚記号，あるいは文学的想像力との共感覚（synesthesia）のあり方を探る上での興味深い事例として，日本の香道に関心をもちてきた。しかし，匂いの問題をより一般的に，文化の脈絡のなかで考察する機会とその余裕には恵まれなかった。今度，COEプロジェクトでの分担領域の一つとして，嗅覚の文化をとりあげるに当たって，人類文化における嗅覚の位置づけと，その研究の問題点について，一般的に概観することから始めたい。

ヒトの祖先は，哺乳類としては例外的な生活形態である樹上生活を行い，知覚の面でもそれへの適応を遂げた結果，諸感覚のうちでもとくに，近距離を対象とする視覚に多く依存するようになった。前方を向いて平面に並ぶ両眼によって，比較的近距離にある対象を精密に識別できるようになり，両手の把握力を用いて枝渡り（brachiation）を迅速に行うことが容易になった。地上に生活する哺乳動物の多くが，発達した嗅覚をもつとは対照的に，ヒトは他の霊長類の祖先から約600万年前に分かれて再び地上に降り，直立二足歩行を行うようになってからも，基本生活を営む上では，嗅覚に依存する度合いがきわめて低い。例えば，イヌの嗅覚は10のマイナス18乗g/mlの酪酸を知覚できるといわれるが，これはヒトの嗅覚の約10万倍⁽⁶⁾である。それでいて，香を焚き，香水を肌につけ，香辛料で飲食物に香りを添えるなど，しばしば宗教ともかかわる精神生活の領域や，審美的，享乐的側面で，嗅覚のある側面を洗練し，それに伴うさまざまな人工物を作り，社会によって異なる多様な「匂いの文化」を発達させてきた。

ヒトの感性について考える上で，多くの点で対照的な性格を示す視覚との対比で，嗅覚の二つの面に注目したい。

その一は，ヒトのもつ諸感覚のうちでも，視覚が対象をきわめて分節的に明快に，主知的かつ能動

的に捉えるのと対照をなして、嗅覚による認知は、非分節的で曖昧であり、主情的かつ受動的なことである。さらに、感覚疲労 (fatigue) が視覚では起こりにくく、視覚の記憶の持続性も大きいのに対して、嗅覚はきわめて疲労しやすく、数分間で感じ続けられなくなることが多く、嗅覚で感知したものの再喚起も視覚の場合と比べて著しく困難である。全体に、視覚、聴覚に比べて、嗅覚の生理学的メカニズムについては、まだきわめて不十分にしか解明されていない⁽⁷⁾。

その二は、ヒトの外部世界の認知において、嗅覚がそのような性質をもっているのとおそらくは関連して、認知が漠然としているからこそ、嗅覚が喚起するイメージは、そのときどきの主体の、それも意識の表層からは全く思いがけない連想を誘い、しかもそれが強烈に主体の意識下の情感に働きかけようという点である。マルセル・ブルースト作『失われた時を求めて』の、紅茶に浸したマドレーヌ菓子を口に含んだ瞬間に、広大な記憶の世界がよみがえる有名な発端部分などは、文学における創作の領域で、そのような嗅覚・味覚が人間の意識に対してもつ性質をよく描きだしている。同時に、意識の表層に必ずしもかかわらない、しかも気紛れで激しい性質が、嗅覚をめぐる実証的な調査研究を困難にしている要因の一つでもあるだろう。それにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、世界には社会によって著しく異なる、多様な「匂いの文化」が存在し、それぞれ相当数の人々に共有されながら、歴史的な変遷を遂げてきた。

嗅覚のこのような一般的性質からみて、「匂いの文化」の研究には、まず具体的な資料による実証が比較的行いやすい、匂いの文化の外枠ともいえるべき、匂いを享受する方法 (香水・香油など身体への塗布、焚香、嗅ぎタバコのような嗅覚器官への直接的適用、香辛料におけるような味覚と嗅覚の併用など)、当該文化全体のなかでの匂いの位置づけ、用いられる原料とその調達法などについて明らかにして行くことが、第一段階として望ましいと思われる。次いで、他の感性の領域との連合 (association) または共感覚 (synesthesia) のあり方を探ることによって、その文化における嗅覚の位置づけが、より明確になることを期待できるだろう。

このような前提に立って人類の匂いの文化を比較検討して行く上で、まず、川田が従来文化の他の領域について行ってきた、日本、フランス、西アフリカという、直接の影響関係が19世紀末までなく、相互に著しく異なる文化を参照点とする「文化の三角測量」の方法を適用してみることに、研究の第一歩としての意味があるだろう。それに今年度の現地調査においても、川田はフランスと西アフリカで、匂いの文化について、初次的な資料を得たのであるから。

まず、日本とフランスの匂いの文化における違いの第一は、フランスでは著しく発達した、香水を身体につける行為が、日本では明治の西洋化以前にはなかったという点にある。指輪、腕輪、首飾り、耳飾りなど直接身体を飾る慣習も、髪飾りの極度の発達と反比例して、存在しなかった。香を、焚くか袋に入れて、着物に香りを移すという繊細な慣行も、身体への直接の香りづけを避ける仕来りの裏返しとして理解できよう。これは、高温多湿の風土のなかで、日本人が頻繁に身体を水や湯で洗うという生活習慣とも関わっているであろう。アラン・コルバン (Alain Corbin) やジョルジュ・ヴィガレロ (Georges Vigarello) の研究がフランスについて明らかにしたような社会史的背景や、⁽⁸⁾ 日常生活の潔・不潔感の違いも、日仏の匂いの文化の差異を生み出す要因になっているであろう。川田は身体技法の研究において、文化によって異なる、何を気持ち悪く感じるかという、反射的な忌避感覚が根本的な重要性をもつと考えているが、匂いの文化の特性も、何を快い匂いと感じるかについ

てと同時に、反射的忌避感覚という否定的側面から規定してゆくことにも、方法上の意味があるだろう。

また、日本では聞香に用いる香も含めて、原料の香木はすべてインド、東南アジアなど外国からの貴重な渡来品であり、著しく限られた上流階級のみが享受できた。フランスの香水も、一時代前までは、決して大衆的ではなかったであろう。だがグラス地方でも、香水は、革手袋など革製品の香りづけと結びついて発達し、ニオイスマレ、アーモンド、ラヴェンダー、レモン、バラをはじめ、地元には豊富にある香料植物を原料として——無論フランス帝国時代の海外植民地をはじめとする世界各地の動植物も原料に使って——、精練されてきたのであり、日本における香木とは、原料の希少性においても、社会のなかでの拡がりにおいても、大きな隔りがある。

飲食物の香り・匂いの面でも、前述したブドウ酒をはじめとする多種多様な果実酒、さまざまな漿果・香草の芳香をしみ込ませたりキュールに対応するアルコール飲料は、日本にはなかった。香辛料については、家畜の肉を大量に消費、貯蔵しなかった日本では、ヨーロッパで15-16世紀に東洋航路開発の重要な動機の一つとなったような、香辛料への渴望は存在しなかった。トウガラシが、16世紀に日本経由で伝わった先の朝鮮半島で重用されたのに引き替え、日本では香辛料としてマイナーな位置しか占めなかったという事実も、家畜文化との関連を物語っているだろう。ただし、ワサビ、シソ、カラシ（和芥子）、サンショウ、ショウガ、ミョウガ、ユズなど、古くから魚料理その他に添えて、爽やかで洒落な日本風（ユズの場合はユズ湯のような用法も含めて）の香りを生みだしてきたものもある。

III 匂いの文化を探る：西アフリカ三カ国（Benin, Burkina Faso, Mali）

12月に調査したベナンなど、西アフリカの森林地帯では、豊富に自生するイネ科オガルカヤ属（*Cymbopogon*）、シソ科メボウキ属（*Ocimum*）、ショウガ科ショウガ属（*Zingiber*）の諸種の植物が、香料としての塗布用、皮膚の薬用、アブラヤシ（*Elaeis guineensis*）の実からとる油で製造される石鹼の香りづけ、飲食物の香辛料に広く用いられている。個々の植物の記述、利用法については、あまりに煩瑣になるので別の機会にゆずるが、重要な点は、内陸サバンナ地帯（12月に調査したブルキナファソ、マリなど）との対比である。内陸サバンナ地帯では、ショウガ属が希少になり、油脂植物としてはアカテツ科のカリテ（シア・バターの木）（*Butyrospermum paradoxum subsp. parkii*）が、石鹼の原料、皮膚塗布用、料理用油脂として広く用いられる。また、北アフリカ、とくにモロッコのアラブ＝ベルベル文化とも連続して、主に樹脂を用いた焚香の習俗がみられることである。焚香のほか身体への香水の塗布も、マリの中部・北部では広く行われており、大衆性という点では、フランスの香水をしのぐとさえ思われる。焚香用の樹脂をとる植物は、年間降雨量600～1300mmのステップ気候帯では、主にカンラン科ニュウコウ属（*Boswellia*）、年間降雨量600mm以下のサヘル気候帯ではカンラン科のモツヤクジュ属（*Commiphora*）の野生樹であり、マンデ語で *wusulan*（香、とくに焚香）と総称される、匂いの文化を発達させてきた。焚香のための、小穴をあけた蓋付きの土器壺（*wusulan daga*）も、大小さまざまな形のものが製造され、広く売られている。

個々の香の原料としては、先に挙げたような草本や木本の葉、実、根、木本については木質の部

分、樹皮、樹脂（とくにカンラン科 *Burseraceae* のさまざまな木の樹脂）、コケ（苔）類やチイ（地衣）類、用法としては、焚く、煎じる、そのままあるいは油脂に混ぜて塗るなど、用途としては、薬用、防虫用、香りづけなど広汎だが、とくに下半身と衣服に焚きしめ（香炉の上に長衣の裾を拡げて煙を受ける）、あるいは腋の下に塗るなどして、女性が男性を魅惑する目的をもったものが多い。個々の香料についての記述は、あまり長くなるので別の機会にゆずるが、とくにマリ中部のニジェール川大湾曲部で、古くからの北アフリカとの交渉が密接だった地域で用いられている樹脂、苔・地衣類の香には、古代エジプト、西アジアのキリスト教、イスラーム教で宗教儀礼とも結び合わされていた香と、共通するものもある。

IV 西アフリカの音文化について

西アフリカの音文化については、川田にはすでに多年の研究の蓄積があるが、本年度12月の現地調査では、とくにベナンの旧ダホメー王国の王権と結びついた音具（アボメー博物館）[写真8, 9]、ギニア湾岸の森林地帯から、内陸サバンナ地帯へかけての、多様な音文化の流れの交錯するベナンでの各種音具のコレクション（ベナン文化省音楽文化遺産継承プロジェクト収納庫）[写真10, 11, 12, 13]の調査、マリのバンバラ社会における女性グリオット (*jelimuso*) のほめる芸、とくに決まり文句 (formula) を用いての、新しい讃辞の合成の仕方 (Albert Lord 以来の “oral composition theory” の再検討) についての調査に基づく資料を、新たに得ることができた。詳細については、機会を改めて発表する。

V 西アフリカ諸社会での感性の言語表現

とくに、味覚、嗅覚、聴覚の領域での、感性の言語による表現について、初次的な調査を行った。まだ結果を体系的な形で発表できる段階ではないが、今後のこの領域での調査に向けて、質問要項を作成するための基本的な手がかりをつかむことができた。

VI 成果と今後の課題

平成15年度は、極めて限られた時間と予算の制約を受けた研究であったが、フランス、西アフリカ諸国での川田のこれまでの研究の実績と人脈によって、感性の諸領域、とくに嗅覚の文化についての基礎資料を蒐集し、問題の所在を探ることができた。感性の領域でも、言語による表現が精密化しているフランスの表現法を一つの基準にして、他の諸文化でも、諸感性とヒトとのつながりを分節化して、共通の尺度を作る探索を続けて行きたい。とくに平成16年度は、モンゴロイドの人類文化の中での位置づけを探るために、メキシコとモンゴルでの調査を、落合一泰 (メキシコ)、芦澤玖美・楠本彩乃 (モンゴル) の諸共同研究員の協力を得て実施することを予定しており、この両地域では、音文化を含む感性の他の領域、および身体技法、道具と身体技法の関係などの分担項目についても、現地調査を行ってゆく予定である。

注

- (1) 川田順造「身体技法の技術的側面」『西の風・南の風：文明論の組みかえのために』1992年，河出書房新社：64-122頁。川田「基層文化としての身体技法：17世紀以後のフランスを中心に」川田（編）『ヨーロッパの基層文化』1995年，岩波書店：177-203頁。Junzo Kawada, “Notes on ‘the techniques of the body’ among West African peoples”, *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, Vol. 99, No. 3, 1991: pp. 377-391. Junzo Kawada, “Les techniques du corps et la technologie traditionnelle”, in J. Kawada (éd.), *Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires*, Vol. 1, 1988, ILCAA, Tokyo: 83-96. 等
- (2) 民具はじめ物質文化については，川田順造『アフリカの心とかたち』1995年，岩崎美術社，Junzo Kawada “La Boucle du Niger du point de vue de la culture matérielle”, in J. Kawada (éd.), *Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires*, Vol. 1, 1988, ILCAA, Tokyo: 11-82. 等
- (3) Junzo Kawada (éd.) *Cultures sonores d’Afrique*, 1997, ILCAA, Tokyo ; J. Kawada & K. Tsukada (éds.) *Cultures sonores d’Afrique II: Aspects dynamiques*, 2001, Hiroshima City University ; 川田順造「音文化の地域的展開を探る：イスラームを手がかりに」『民族学研究』65 (1), 2000年6月：1-8頁；川田順造「マンデ音文化とハウサ音文化：イスラーム音文化の地方的展開」『民族学研究』65 (1), 2000年6月：62-77頁，等
- (4) 背負い運搬において，フランスをはじめ西ヨーロッパでは，背負う荷の上の方に重い部分が来るようにして，重心を高くした形で背負う傾向があり，背負い籠も逆円錐形に底がすぼまっているものが多く，背負いベルトも籠の下に寄ってついている。このような荷の背負い方から，フランスでは頸椎の部分を前屈させ，肩から背の上部で担う形になるのに対し，日本では脊柱全体を前傾させ，むしろ腰椎で荷を支えながら歩行することになる。川田「身体技法の技術的側面」『西の風・南の風：文明論の組みかえのために』1992年，河出書房新社：80-86頁
- (5) Junzo Kawada “La culture technologique en France”, in H. Ninomiya (éd.) *Les cultures fondamentales d’Europe* (à paraître).
- (6) 外池光雄「香り」2，香りの客観的測定法，大山正・秋田宗平編『知覚工学』福村出版，1989：159.
- (7) Edmond Roundnitska (1980) *Le parfum*, Presses Universitaires de France, Collection “Que sais-je?” 1888; Paris. Vittorio Bizzozero (1997) *L’Univers des odeurs: Introduction à l’olfactologie*, Éditions Médecine et Hygiène, Dpt. Livres Georg, Genève.
- (8) Alain Corbin (1986 [1982]) *Le miasme et la jonquille: L’odorat et l’imaginaire social XVIIIe-XIXe siècles*, Flammarion, Paris; Georges Vigarello (1987 [1985]) *Le propre et le sale: L’hygiène du corps depuis le Moyen Âge*, Éditions du Seuil, Paris.

(事業推進担当者)



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

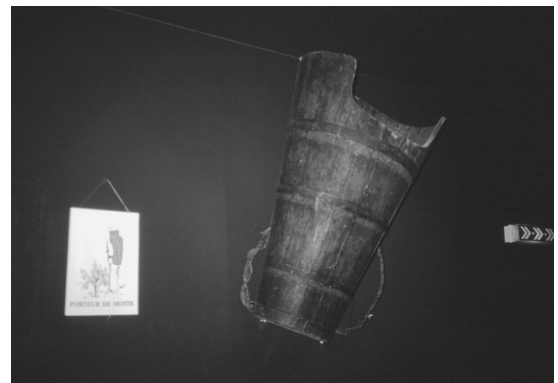


写真6

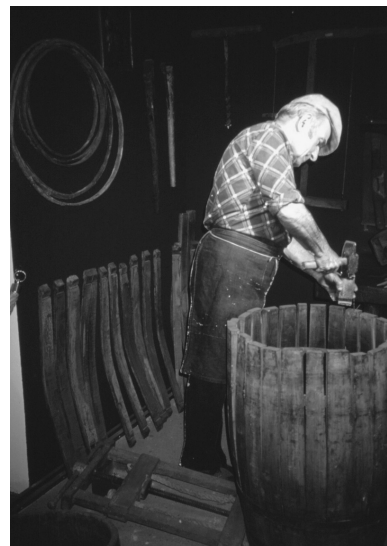


写真7



写真8 真鍮の双生ゴング *gankuéké*

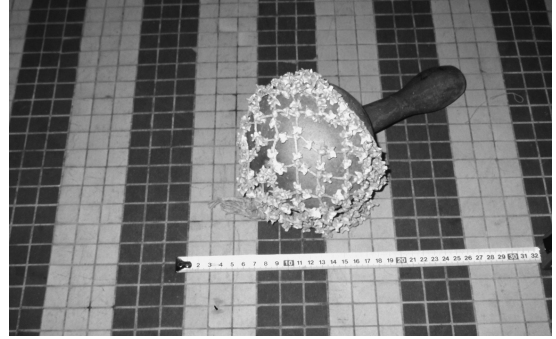


写真11 ヒョウタンのガラガラ *assan*

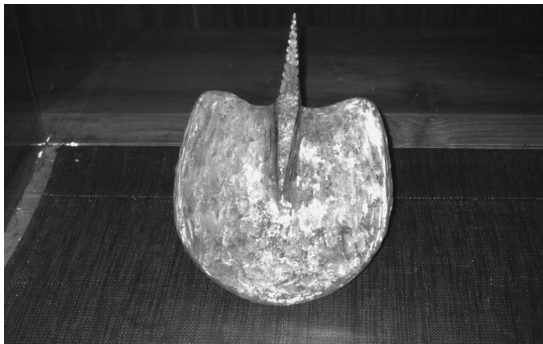


写真9 鍬の刃形の体鳴音具 *kpanlingan*



写真12 鉄の大型ゴング *gansu*



写真10 球形ヒョウタン太鼓 *bata*



写真13 木の円筒胴組太鼓 *dogba*